

山路澄子略伝

<戦前・戦中篇>

伊佐山潤子

はじめに

山路澄子氏は戦後鹿児島県における婦人会活動の草分けの人であり、始良町婦人会長を皮切りに、女性では初めての県農業会議委員、県婦人会長、県婦人団体連盟の初代会長その他各種の役職を歴任、売春防止法制定にあたっては先頭に立って運動するなど、長い間活躍して来られた。南日本新聞連載の『かごしま人紀行 始良町』では「スーパー・レディ」と紹介されている。地域に根ざした活動家の一人として本県の女性のために働き続けられたその足跡は、長く記憶さるべきものと思われる。

この報告は、1989年10月14・28日、11月12日、12月16日の4回にわたって、始良町三拾町のお宅でインタビューして得た内容にその後の調査を加え、当時の状況をまじえながら再構成したものである。

当初、訪問の目的は、氏の戦後の活動について尋ねそれを記録することにあつたのであるが、インタビューを重ねるうちに、諸活動の根底にある氏のものもの見方・考え方等は出生以来のさまざまな経験、とりわけ外交官であった夫君の赴任による欧米での長い生活体験を抜きにしては充分に把握できない面の多いことが明らかとなった。そこで戦後の活動に関する報告は別途まとめることにし、本稿では山路氏の前半生史、すなわち誕生から、敗戦後長かった海外生活にピリオドを打って始良町に落ち着くまでの時期について、仮りに<戦前・戦中篇>と名付けて述べるものである。

なお、以下文中では敬称を省略し、年齢は満年齢を用いてあることをあらかじめお断りしておく。

1

山路澄子は1904（明治37）年8月31日、父小森雄介、母てるの1男6女の2番目の子、長女として誕生した。日露戦争が始まって、広瀬中佐が旅順で戦死、乃木大将が2人の息子を亡くし、与謝野晶子が「君死にたまふことなかれ」とうたった年のことである。

出生地は東京市麻布区烏居坂町（現在の港区六本木）、母てるの実家があったところ。てるは長沢鼎の姪にあたる人である。「長沢鼎」は、1865（慶応元）年薩摩藩が15名の若者に英国留学を命じた際、幕府を意識して全員が変名を用いた中の1つで、本名磯永彦輔。留学当時13歳で、後アメリカに渡り、カリフォルニア、サンタローザ近くのフォンテングローブに農園を建設、生涯独身でその地にとどまり、ワインで財を成したことは知られている通りである。その「長沢」の実弟で、赤星家の養子になった弥之介がてるの父である。それで、澄子からいえば長沢鼎は大

伯父にあたる。現在でも港区は在日大使館の約6割が集中する、外国とのつながりの深い所であるが、これは江戸幕府が鎖国を解いて以来の伝統で、明治になってからも欧米文化移入の窓口の役割を果たして来た。その中で麻布は典型的ないわゆる「山の手」、ハイカラな高級住宅街であった。ここに居を構えた赤星弥之介は貿易を営んでおり、てるはその次女、1881（明治13）年の生まれである。

父、小森雄介は鹿児島市高麗町の出身。士族小森新蔵の六男として1875（明治7）年に生まれた。造士館から東京帝大に進み、卒業して法学士。衆議院属、台湾銀行書記など勤めた後、ハーバード大学に3年間留学、欧米視察をして帰国した翌年、1909（明治41）年、第二次桂内閣の通信大臣後藤新平の秘書官に。日豊本線の建設等にかかわったことが縁で、秘書官を辞めた後宮崎県から立候補して政友会系の代議士になったが、政党間の煩しさに嫌気がさして一期で引退、以後フリーの政治家として活躍し、また同郷の後進の世話などをしていた。

「父は本質的に自由人でしたね」と澄子は言う。また、「私は母の影響を強く受けています」とも。7人の子を産み育て、人の出入りの激しい家の主婦として立ち働く母親の姿を、長女であった澄子は良く見ていた。

澄子が育ったのは麴町（現在の千代田区麴町）で、ここもまた江戸時代以来の「山の手」、父方・母方ともに外国とのつながりが濃かったことから澄子はすべて洋風に育てられた。当時としては珍しい、夜はベッドで休むような生活である。後年の外国暮らしがちっとも苦にならなかったというその下地は、すでに澄子の誕生の時から整っていたといえる。

1911（明治43）年、番町（現在の千代田区六番町）に創設されたばかりの、カトリック系の雙葉幼稚園・小学校を経て女子学習院中等科に入学。得意な科目は歴史で、特に「西洋史が大好き」だったそうである。歴史の先生が熱心な人で、同時代に東洋ではこう西洋ではこうと、斬新な教え方をされたらしい。「それが実に面白くてね」と懐しむ。島崎藤村の「破戒」に感動し、トルストイやロマン・ロランに親しむ女学生であった。中でもトルストイには傾倒し、後、1975（昭和50）年にソ連を訪れた際には日をさいてトルストイの家を訪ね、それがその時一番楽しかったという程である。この頃から早くも、澄子の、常に世界史的にもものを見る目、人道主義的思想が養われていたことがうかがえる。

1921（大正10）年学習院高等科に進学するが、翌22年、外務省に入ったばかりの山路章と婚約して中退。当時の良家の子女にはよくあった「婚約による中退」である。それからしばらく花嫁修業をする。といっても、澄子の場合海外へ行くことがはっきりしていたので、一般的なお茶お花の類ではなく、もっぱら英語の勉強と洋裁に励んだということである。

澄子の成長期はちょうどいわゆる「大正デモクラシー」の時代と重なる。政治・社会・文化のいろいろな面で民主主義的・自由主義的な傾向が強かった時期である。澄子もその影響を多分に受けている。また、ヨーロッパは第一次世界大戦を経験したが、日本はほとんど戦争らしい戦争もしないままパリ講和会議に戦勝国の一員として参加、英・米・仏・伊と並んで会議の主導権を握る五大国の一角を占め、アジアから初めて世界外交の表舞台に上る国となった。開国以来、欧米に追いつけとがむしゃらに進んで来た日本が、ようやくその目的を遂げようとしてつつある時で

あった。しかし、パリ会議で人種差別撤廃条項を加えるよう要求したことが皮肉にも列強の反感を買い、特にアメリカでの排日運動に火をつける結果を生んだ。また、対華21ヶ条の要求、シベリア出兵、朝鮮の独立運動（「三・一運動」）、中国での排日運動（「五・四運動」）など外交面での問題は多く、国内でも米騒動が起こるなど、盛り上がる「デモクラシー」の陰で将来の破綻の端緒があちこちに見えていた。

2

澄子の婚約者山路章は、堤藤助の三男として1896（明治29）年始良町に生まれ、後、山路家の養子となった人。澄子は「彼は19世紀の人間、私は20世紀の人間よ」と、その違いを強調する。七高から東京帝大政治科へ進み、しばらく熊本県属官を勤め、婚約した年に外務省入りしたばかりであった。1923（大正12）年7月末、二人は結婚。章27歳、澄子18歳である。

8月、章の赴任先であるワシントンへ向けて横浜から出航。ホノルルに着いたのがちょうど9月1日で、関東大震災のニュースが飛び込んで来た。「東京・横浜は全滅」と艦内放送があったそうで、澄子は親兄妹、親類皆死んだものと、すっかり打ちひしがれてしまった。ところが章は慰めの言葉ひとつかけてくれず知らん顔。「彼はもともと熱帯とか南洋とかにあこがれていてね、ハワイに着いたものだから何だか一人ではしゃいでいるの。こっちはもう親兄妹全滅だと思っているのに、一体何て人と結婚しちゃったかって、頭に來たわ」とは澄子の言である。しばらくしてから家族も親類も無事とわかり、ほっとするという一幕であった。

その後、先に述べたサンタローザの大伯父長沢鼎の農場で一週間程遊び、ワシントンに到着。赴任の途中で遊んで来るとは何ごとかと大使館で大変叱られたそうだが、ともかくも、ここから澄子の外国生活が始まる。ワシントンで海軍軍縮会議が開かれた翌年のことである。

1923年のアメリカは共和党のウオーレン・ハーディが大統領の時代。ハーディの急死により後継となったカルヴィン・クーリッジもハーディ路線を押し進め、前任のウッドロー・ウィルソン（民主党）の一種ピューリタンの色彩の強い時代とはうって変わって、陽気で自由な空気が満ちていた。禁酒法が存在したとはいえ、それが有名無実のものであったのは周知の通り。空前の経済成長期にあったアメリカでは、1920年の婦人参政権獲得後進んだ女性の社会進出ともあいまって、ラジオ・蓄音機・扇風機・冷蔵庫・真空掃除機などの家庭電気機器が急速に普及し、大量生産される自動車が一般労働者にも手の届く値段で売られるようになってきていた。ペープ・ルース人気で野球が国民的スポーツとなり、マージャン熱が広がるなど、一部には享楽主義の傾向も強かった。

が、南部から中西部にかけては農産物価格の暴落で不況が進行し、工場労働者の貧困問題など、深刻な悩みもかかえていた。これを背景にして、白人至上主義組織であるK K K（クー・クラックス・クラン）が復活し、1924年そのメンバーはおよそ400万人。ワシントンで行なわれたデモ行進には4万人が参加したと言われている。白人至上主義は移民排撃に直結し、中でも東洋人に対する風当たりは相当に厳しいものがあつた。この年、排日移民法が成立。日本人は帰化不能外国人と見なされ、入国を全く禁止されることになった。

排日運動は、明治以来日本からの移民が増加するにつれて太平洋岸地域の各所でしばしば起こっていたが、日本が日露戦争で勝利を得、パリ会議で欧米列国に並ぶようになってからますます激しさを増し、ついに連邦政府の行動としては初めてのこの法案の成立を見るに至った。先のパリ講和会議で一等国入りを果たしたつもりになっていた日本人には、この法案は屈辱的なものに映り、アメリカでは排日、そのため日本では反米熱が高まるという危険な状況が生まれた。澄子も「ずいぶん侮蔑的待遇をされましたよ」と言う。勿論大使館関係者であることがわかれば相手の態度も変わったが、一個人として市民の中に入ると嫌な思いをすることが多かったそうである。

このような時、澄子は最初の子供を出産する。女の子であった。ところが、この子は生後わずか7日で亡くなってしまふ。ついさっきまで元気にお乳を飲んでいたのに、という程突然の死であった。排日運動が盛んな折しも、病院の看護婦が東洋人の赤ん坊と見て疎略に扱ったのではないかと、言い出す者が大使館の中から現れた。というのも、産婦と乳児は別々の部屋に寝かされており、授乳の時にしか親子が顔を合わせることがなかったからである。結局赤ん坊は解剖に付された。小さい血の固まりが血管を塞いでしまっていたそうである。「コロンビアホスピタルという病院でしたよ」と澄子は65年も昔のことをつい昨日のでき事のように語った。

翌1925（大正14）年7月、長男が誕生する。アメリカでは無痛分娩が普通で、お産の時妊婦に麻酔をかける。最初の子はそれが良くなかったのではないかと日本の親から言って来たので、澄子は今回は医者には麻酔をかけないようによくよく話しておいた。ところが陣痛が来るたびに、「すぐ横にいるお医者さんが麻酔をかけるか、かけるかって言うの。ずいぶん頑張ったんだけど、あんまり何回も言われるものだから、最後にとうとうハイって言っちゃった」と澄子は笑う。実は、章には既に帰国命令が出ていたのだが、澄子の出産のために延期してもらっていた。今度の子は順調に育ち、12月、親子三人で帰国する。澄子は21歳で母になった。

3

この年の3月、日本では普通選挙法案にひき続き治安維持法案が衆議院で可決され、4月には中等学校以上の学校で現役陸軍将校による教練を実施することが決まるなど、「大正デモクラシー」も終焉を迎えようとしていた。一方ラジオ放送が開始され、ラジオが普及し始める。翌1926年11月大正天皇が亡くなり昭和と改元。

1927（昭和2）年、11月澄子は23歳で2番目の子を出産。今度は女の子であった。12月に章はハンブルク領事館に副領事として転出。澄子は出産直後であり、章だけが単身赴任をする。第一次山東出兵が行なわれ、芥川龍之介が「将来に対する唯ぼんやりとした不安」を理由に自殺した年。芥川の死はそれ以後の時代を暗示するような象徴的な死であったが、澄子にはまだ何ら想像もつかないようなことであった。

長女が生後半歳になった1928（昭和3）年、澄子は2人の子供を連れて章のいるハンブルクへ行く。元看護婦という人を子守りに雇って、4人の旅であった。この年アムステルダムオリンピックで日本は初の金メダルを獲得。章も副領事から領事に昇任した。

翌29（昭和4）年、澄子は25歳で次女を出産。30年には章がベルリン大使官の三等書記官となり、一家でベルリンへ。この時ベルリンには参事官として同郷の先輩でもある東郷茂徳がいた。東郷との関係はこれ以後章にとって大きな意味を持つことになる。

このあたり、澄子も忙しい。日本から連れて行った子守りは1年ほどで神経衰弱になり帰国してしまった。その後ドイツ人のナース（ドイツ語で「キンダーフロイライン」と呼ばれる正式の教育を受けた保育者。いわゆる看護婦とは全く異なるが、便宜上ナースとしておく。）とメイドを雇い、3人の子供を育てるかたわら、ベルリン大学の外国人のためのコースに通ってドイツ語を本格的に勉強する。ハンブルクでも個人教授を受けてはいたのだが、英語が良く通じる土地柄なのであまり真面目にやらなかった。ところが「ベルリンでは英語が全然使えないの。わかってても使わないのよ、ベルリンの人は。ドイツ語しかだめなんだから仕方なしに」始めた大学通いであった。この時ドイツ語をしっかりと身につけておいたことが後で大いに澄子を助けることになる。

この頃のエピソードをひとつ。メイドが実際にこまめに家の中の電燈をつけたり消したりして歩く。育ちがらずいぶん鷹揚なところのある澄子が何の気なしに、「電燈くらいいいじゃないの、つけておけば。お金はちゃんと払っているのだし」と言った時のメイドの返事が、「お金を払うのはあなたの勝手ですが無駄な電気を使うことは国家にとっては非常な損失です」というものであったそうだ。「これにはびっくりしましたよ」と澄子は言った。小学校を出たか出ないかという程度の学歴のメイドが、社会・国家というものの考え方をしている。子供の時から社会性を身につけさせる教育がいかに徹底してなされているかに驚くと同時に、多くのことを考えさせられたでき事であったそうだ。

章は1931（昭和6）年、二等書記官に昇進、結局ベルリンでの生活は34年まで続くことになる。

澄子たちがドイツで過ごした1920年代後半から30年代前半にかけては、第一次世界大戦の痛手からようやく立ち直りかけていたワイマール共和国の中からヒトラー率いるナチスが抬頭し、ついにはいわゆる「第三帝国」が出現する、激動の時期にあっていた。

1919年のヴェルサイユ条約でドイツは戦争の責任を一身に背負わされ、大幅な領土の削減、軍備縮小を求められ、それでなくても戦後の過酷な経済状況の中で最終的には1320億マルクという天文学的数字の賠償金まで要求された。戦勝国による一方的な条件を押しつけられ、受け入れざるを得なかったドイツ国民は、屈辱と怒りでこれを受けとめ、特に下層中産階級に反ヴェルサイユ体制の感情が広がった。章がワシントンに赴任した1923年には戦後のインフレが頂点に達し、12月には1ドルが4兆2千億マルクという破滅的な貨幣価値の暴落を見た。ビール1杯が10億マルク、卵1個の値段が大戦前の21万個分という途方もない事態である。ヒトラーの登場はこの年のことであった。23年1月、ナチス最初の全国党大会が開かれ5000人のSA（突撃）隊員が行進。戦後の混乱の渦中にあった若者を中心に「秩序と規律」を求めて続々と党員が増加。11月、「ミュンヘン一揆」と呼ばれるクーデターを起こしたのがアドルフ・ヒトラー34歳の本格的な初舞台であった。前年のムッソリーニの「ローマ進軍」とその成功によるファシスト政権の成立に

習って、この時ヒトラーが考えていたベルリン進撃の企てはあっけなく失敗に終わったが、将来その威力を遺憾なく発揮することになる恐るべき弁舌の才を示した事件でもあった。

翌24年、賠償金の支払い方法についてドーズ案が成立。賠償総額を一時棚上げにし、とりあえず向こう5年間に支払われるべき金額をきめ、ドイツ経済を救おうとする主旨のものである。この結果、アメリカ資本を主とした外貨が大量に流れ込み、経済は少しずつ回復して行く。しかし、失地回復を狙う国防軍は早くも極秘に再軍備に着手するなど、その後の波乱の芽生えも見られた。

前年の「ミュンヘン一揆」に失敗して獄中にあったヒトラーは『わが闘争』を執筆、年末に釈放されるやすぐに党を再建、25年には著書を出版。政権掌握を目指して着々と歩を進めつつあった。

1926年には国際連盟への加入を認められ、27年には連合国監視委員会も引きあげるなどドイツ社会も落ち着きを取り戻し、澄子が子供たちを連れてハンブルクへ到着した28年はワイマール共和国が「安定と繁栄」の絶頂にあった年と言われている。

しかし、翌29年、ニューヨークのウォール街で起こった株式市場の大暴落に始まる恐慌が徐々に世界的に波及して行く中で、先のドーズ案成立以来アメリカ経済に全面的に依存していたドイツは決定的な打撃を被り、まさにアメリカと「共倒れ」状態に落ち込んでしまう。大量の失業者を出した一般大衆はワイマール共和国政府の無策に腹を立て、議会制民主主義にも失望して、救世主として強力な指導力を発揮してくれる人物の登場を待ち望んでいた。それがヒトラーとナチス抬頭の土壌となったのである。

1930年、澄子たちがベルリンへ移った年、ヒトラーはヨーゼフ・ゲッベルスを党宣伝部長に任命。巧みなプロパガンダによって大衆を動かし、9月の総選挙の結果ナチスは躍進して一挙に国会の第二党の座を占める。年末にエーリヒ・マリア・レマルクのベストセラーを映画化した『西部戦線異常なし』がベルリンで公開されると、ゲッベルスはこれに目を付け、ドイツ軍人精神を侮辱するものと口実のもとに、SA隊員を総動員して上映を妨害。繁華街で大騒ぎを行なわせるなどして公開中止に持ち込み、結局この映画は上映を禁止されてしまった。この頃からSA隊員の傍若無人ぶりが目立ってくる。

1931年には新たな金融恐慌がドイツ経済に追い打ちをかけ、翌32年には失業者が600万人を越える。7月の総選挙でナチスは完全に第一党にのし上がってしまった。また、大統領選挙でパウル・フォン・ヒンデンブルクに破れたとはいえ、ヒトラーは1341万票を獲得して全世界を驚かせた。

1933年1月、ヒンデンブルクの任命によりヒトラーは首相に就任。「第三帝国」の始まりである。2月国会議事堂放火事件、3月大統領令により共産党・社会党に対する弾圧とユダヤ人排撃開始、4月ゲッベルスの指揮のもとSAによる全国的なユダヤ人商店ボイコット、全権授与法によりヒトラー独裁権獲得、5月ユダヤ人の著作を焚書に、7月対立政党のすべてを解散、10月国際連盟から脱退、軍備強化開始・・・驚異的なスピードでナチスが政権を握り、ドイツがファシズムの道をつき進んで行く過程を、澄子はつぶさに見ていた。

中でも澄子が注目していたのはゲッベルスによるプロパガンダの威力である。ナチスが次々に大衆の支持を得て行く力の恐ろしさと言ってもよい。

ゲッベルスは1925年にナチスに入党、30年に党宣伝部長になったことは既に述べた。33年ヒトラー内閣が誕生すると、「国民啓発・宣伝」担当の大臣に就任して、新聞・ラジオ・映画・演劇・造型美術・音楽等、あらゆる文化面で統制を実施。特に、一時に大量の大衆動員が可能な映画を大いに利用した。

そもそも宣伝手段としての映画の重要性に最初に着目したのは、第一次世界大戦時のドイツ帝国軍参謀長エーリヒ・ルーデンドルフである。ルーデンドルフは早くも1917年に政府機関として「写真・映画部」を作らせ、もっぱら軍事宣伝にあたらせていた。その伝統の上にゲッベルスもある。

ただ、ゲッベルスは個人的にセルゲイ・ミハイロヴィチ・エイゼンシュテインの『戦艦ポチョムキン』の影響を強く受けている。この映画がベルリンで公開されたのは1926年のことであるが、ロシア国内でよりもはるかに強烈な反響があったと言われている。1905年のポチョムキン号の反乱を題材にしたこの作品は明らかに大衆の煽動を目的としている。史実ではこの反乱は失敗に終わり、乗組員の亡命の後に船は沈められているのだが、映画では、この船をロシア革命を勝利に導いた先駆け、革命のシンボルとして描き、反乱の勝利を結末としているのである。1933年3月、映画産業界の関係者を一堂に集めて演説した際、将来の製作の規範となるべき作品を5本挙げたゲッベルスは、その第一番目に『戦艦ポチョムキン』の名を出して激賞した。この時聴衆はあっけにとられたという。ナチスの大臣がこともあろうにユダヤ人の作った共産主義の宣伝映画を絶賛したのであるから、それももっともなことであった。だが、ゲッベルスが作品そのものよりも宣伝手段としての映画の重要性とその効果という点で『ポチョムキン』に注目していたのは間違いのないところである。個人よりも集団の方が絶対的に優位な位置を占めている『ポチョムキン』の性格は、共産主義をヒトラーとナチズムに置きかえるだけでそのまま有効に利用できる便利なものというに過ぎなかったのだ。

この、映画による啓蒙・宣伝という方法を、澄子はずっと後になって抜け目なくしっかりと応用している。戦後、始良町で活動を始めた時、町に映写機を買わせ、青年団員運転するところのオートバイの後ろに乗り、16ミリ映画を持って各公民館で上映してまわったと言うのである。勿論この時の目的は共産主義でもナチズムでもなく、民主主義であり、選挙の棄権防止の呼びかけであり、婦人の地位向上、子供の権利を守ることなどであった。「あのゲッベルスのやり方よ、あれだと思ったの」と、事もなげに言っている澄子である。

1934（昭和9）年初頭、章が本省勤務となり、澄子一家は帰国した。

4

日本に帰って半年後、34（昭和9）年8月、澄子は4人目の子供、次男を出産した。澄子も30歳になった。章は外務省欧亜局第二課長。時の欧亜局長はベルリンでも一緒に、前年一足先に帰国していた東郷茂徳である。

澄子たちがドイツで暮らしている間に、日本では軍部の力が増す一方の状態であった。1928（昭和3）年第二次山東出兵、張作霖爆殺事件、31（昭和6）年柳条湖事件から満州事変へ、32（昭和7）年上海事変、満州国建国宣言、五・一五事件、33（昭和8）年国際連盟脱退と、軍部の暴走が相次ぎ、外務省はそのあと始末に追われればなし。ナチスドイツと同じように、日本もまたファシズムへの道を歩き始めていたのである。このような状況の中で、章は後に「日独防共協定」として締結されるドイツとの提携問題に忙殺される。

日本もドイツも同じ1933年に国際連盟を脱退、英・米中心の世界情勢を快く思っておらず、反ソ連・反共産主義の姿勢などの共通点があって、特に陸軍にはドイツと手を結ぶことを主張する者が多かった。ベルリン大使館付陸軍武官大島浩少将もその一人で、大島は秘かに当時ナチスの外交部長であったヨアヒム・フォン・リッペントロップと会談し、外務省の全くあずかり知らないうちに提携に関する話を進めていた。外務省がこのことを知るのは1936（昭和11年）になってからである。

この年、二・二六事件が起こって内閣は総辞職。初め近衛文麿が首相になりかけたが、健康を理由に土壇場で辞退。外交官出身の広田弘毅が首相の座についていた。

広田首相、また外務省にとって都合の悪いことに、外務大臣になった有田八郎が1935年の時点でベルリンで大島に会った際、自分は日独提携に賛成だと言っていた事実があり、これを盾に陸軍は強硬な態度で臨んで来た。ただ、外相としての有田は、ドイツとあまり深入りするのはいま好ましくないが、「薄墨色程度の協定には賛成である」という姿勢を示した。この「薄墨色」というのが、軍事同盟ではなく「防共協定」を結ぶことであった。

だが、担当局長である東郷茂徳は頑強に反対した。東郷はヒトラーがいずれヨーロッパ、ひいては世界に「大動乱」を引き起こすに違いないと見ており、ドイツと手を結ぶのは日本にとって得策でないと考えていたためである。これは同時に広田首相の考えでもあり、外務省は何とか日独提携を避けようと必死の努力をした。大島とリッペントロップとの話が既に相当進んでいて、今さら白紙撤回は不可能ということがはっきりした時、東郷は日独提携と同時に日本とイギリスの間で何らかの政治的協定を結ぶことが絶対必要であると主張して譲らず、陸軍側の強硬な反対をついに押し切ってこの条件を認めさせた。章は直接担当の第二課長として、この軍部との交渉にあたっている。「同郷の後輩で、東郷さんも使いやすかったんでしょね。あの時は主人も本当に苦労していましたよ」と澄子は言う。

しかし、結局外務省の努力は何ら実を結ばず、1936（昭和11）年11月「日独防共協定」が締結された。

この年スペイン内戦が始まって、各国の関心はスペインに集まっており、その間隙を突いての日・独の提携であった。この協定が発表された時、当然ながらソ連は反発し、以後日ソ間の関係は悪化の一途をたどることになる。東郷は後にその手記で、この協定により「ドイツは欧州に於て英仏ソ等を牽制するに資した所が少なくないが、我国としてはむしろ失う所が多かった」と述べている。章も同じ思いであったろう。

この時以降、外務省の外交による平和維持の仕事は端から陸軍に覆される格好で、日本は太平

洋戦争になだれ込んで行くことになる。

翌1937（昭和12）年、盧溝橋事件から日中戦争が始まり、一方、先の防共協定にイタリアが加わって三国枢軸が形成される。

1938（昭和13）年、国家総動員法発令、張鼓峰事件。この年、章、初代ウイーン総領事として赴任。長男だけは学業の関係で日本に残し、澄子も3人の子供と一緒にウイーンへ。ベルリンオリンピックに間に合わなかったと澄子は残念がる。長男と再会できるのは8年も後のことになるのだが、そんなこととは夢にも思わず、またドイツでの生活が始まった。

5

4年ぶりのドイツはすっかり様変わりしていた。ウイーン総領事館自体が、この年3月にナチスドイツがオーストリアを併合したためにできたものである。

1933年ヒトラーが首相になった年、澄子たちがドイツを離れた直後に、悪名高いゲシュタポ（国家保安委員会）が創設されている。翌34年、ヒンデンブルクの死去によりヒトラーは首相と大統領を兼ねる「総統」に就任、国民のほぼ90パーセントがヒトラーを支持していた。ヒトラーはまた、国防軍最高司令官も兼任して、ドイツ国内における全権力を一手に握る独裁者となった。SA（突撃隊）にかわってSS（親衛隊）のハインリヒ・ヒムラーが抬頭して来、ゲシュタポの管轄権も手に入れて、人々に恐れられるようになる。ニュルンベルクで行なわれた党大会は大成功をおさめ、レニ・リーフェンシュタールがヒトラーからじきじきに依頼されたその記録映画『意志の勝利』は、宣伝大臣の立場を無視されたゲッベルスの妨害にもかかわらず完成され、ゲッベルスですらヒトラーとナチスの宣伝のために効果的であると認めざるを得ない出来栄であった。世界的にも重要な記録映画と認められ、37年のパリ万博では金メダルを得ている。

35年には一方的にヴェルサイユ条約を破棄して再軍備を宣言。また、ニュルンベルク法の成立によってユダヤ人の公民権が剥奪されることになり、以後ユダヤ人に対する迫害は急速に激化して行く。ところが、直後にイタリアのエチオピア侵攻が始まったため、世界はこの件には無関心のままであった。

1936年、ラインラント進駐。ベルリンオリンピックが開催され、反ユダヤ主義のキャンペーンは一時的にドイツから姿を消し、多くの外国人が歓待に気分を良くして帰国した。オリンピックをナチスの業績の「ショーケース」にしようとしたヒトラーの意図は十分に果たされた。『意志の勝利』に続いて、またレニ・リーフェンシュタールが記録映画を製作し、『民族の祭典』『美の祭典』の二部作は世界的な名声を博した。ゲッベルスの妨害はここでも何ら効を奏さなかった。同年ベルリン・ローマ枢軸の結成、スペインのフランコ政権承認、日独防共協定締結。

1937年、空軍によるスペインのゲルニカ爆撃、日独伊防共協定締結。

1938年3月オーストリアを併合。国民投票の結果、ドイツでもオーストリアでも99パーセントを越す国民がこの併合を承認した。章が初代ウイーン総領事になったのはこの時である。オーストリアの併合は、ドイツが東方へ進出するために踏み出した最初の一步であった。11月9日から

10日にかけて、「水晶の夜（クリスタル・ナハト）」と呼ばれるユダヤ人に対する迫害が、ゲッペルスの指揮のもとにドイツ領内全土で繰り広げられた。ユダヤ人商店の窓ガラスが打ち砕かれ、デパートや民家で略奪が行なわれ、教会は燃え上がり、多くの死者が出た。年末までに約3万人のユダヤ人が強制収容所送りとなり、以後ユダヤ人の生活は停止してしまった。在外公館の抗議が相次ぎ、各国のマスコミも取り上げたが、積極的な救済措置がとられることはなく、最終的には600万人とも言われる犠牲者を生むことになるユダヤ人絶滅作戦が始まったのであった。

1939年3月、チェコスロヴァキアを併合して南側の安全を確保するや、8月、世界をあっと言わせた独ソ不可侵条約を結び、9月1日ポーランドに侵攻、3日、フランス・イギリスがドイツに宣戦して第二次世界大戦が始まったのは周知の通りである。

翌40年、ドイツは破竹の勢いで進撃し、ノルウェー・オランダ・ベルギー・ルクセンブルクを次々と落とし、6月にはフランスも降伏。ウィンストン・チャーチルを首相に戴くイギリスだけが抗戦姿勢を崩さなかった。9月、日独伊三国軍事同盟締結。この時のドイツ外相はリッベントロップ、駐独大使は大島浩であった。防共協定の強化という形で進められたこの同盟に章は複雑な思いを抱いたことであろう。

41（昭和16）年3月、澄子は7年ぶりに三男を出産する。5人目の子である。上の子供たちとかなり年が開いており、澄子も37歳になっていたことから、「余計な子」とからかわれた子供である。しかし「ブツイ（お気に入りの絵本の小犬の名）」という愛称で、一家のマスコットの存在となった。

この年6月、ドイツは突如ソ連に侵攻、モスクワにまで迫る勢いであったが、12月にはソ連側の反撃が始まる。同じ12月、日本はアメリカ・イギリスに対して宣戦布告、太平洋戦争の勃発により、独・伊もアメリカに宣戦、世界中が戦場となった。この12月、章はブルガリア公使に任命されて、一家はブルガリアへ移動する。ウイーンでの生活は3年で終わりを告げた。

が、ここで澄子は多くの友人を得、後にその人たちに大いに助けられることになる。クーデンホフ・光子とも知り合いになった。光子の息子リヒャルトは、今日のECの生みの親として知られている。まだこの頃はドイツも快進撃を続けており、澄子たちの生活にも余裕があった。休暇になるとザルツブルクを中心に田園生活を心行くまで楽しみ、東の間の平和を味わった時であった。

6

章が公使として赴任したブルガリア王国は、大戦が始まった時中立の姿勢を示していた。だが、41年3月、日独伊三国同盟に加入しており、12月にはイギリス・アメリカに対して宣戦布告。ただ、ソ連に関しては中立を守っていたところであった。42年になるとボリス3世のファシスト的独裁政治に対して左翼政党による祖国戦線が結成され、パルチザンの活動も活発化、翌43年ボリス3世が急死し、わずか6歳のシメオンが即位した。この年1月には東部戦線のドイツ軍が敗退し始め、連合国側が反撃に転じる。既に42年4月に最初の連合軍の爆撃を受けていたブルガリアに対して、この年の9月に降伏したイタリアを基地にした米軍の爆撃はますます激しく

なり、公使館公邸のすぐそばに爆弾が落ちるなど、非常に危険な状況になって来た。また、それまで親独派が権力を握っていたのが、戦況の悪化と共に親ソ派が徐々に力を持って来ており、その点でも危いというので、澄子は4人の子供を連れて疎開することにした。「私1人なら動きませんがね。何しろ子供がいましたから。一番下はまだ2歳だったし」と澄子は言う。友人の多いウイーンへ、5人は逃れる。その後、ザルツブルクに友人が借りておいてくれた家に移り、そこで1年余り暮らすことになった。

ザルツブルクはモーツァルト誕生の地、夏は避暑、冬はスキーで賑わう所である。澄子にとってはウイーン滞在時代にしばしば休暇を過ごした思い出の場所でもある。そのザルツブルクで、戦争中だというのに外交官特権で配給も豊富にあり、親身になって世話をしてくれる友人も多く、「申しわけないくらいのおんびりした暮らし」をしたそうだ。「その友だちというのはナチの党員なのよ。ナチスって言うと皆さん鬼か何かのようにおっしゃるけれど、普通の人ですよ。だって党員にならなければ職業にもつけないような時代だったのですからね」とも。

澄子と子供たちはひとまず安全ということになったが、ブルガリアに残った章の方はますます危くなって来た。44年9月にはソ連がブルガリアに宣戦布告、領内への進撃を始める。同じ頃、パルチザンと祖国戦線が首都ソフィアその他の都市で権力を握り、祖国戦線による政権が誕生した。そして今度は逆にドイツに対して宣戦を布告する。このため、ブルガリアと日本とは国交断絶、日本の公使館関係者は総引きあげせざるを得なくなった。章はこの後しばらく、トルコのイスタンブールで軟禁状態にされる目に合う。日本では「山路死亡説」が流れたそうである。澄子たちとの間も全くの音信不通となってしまった。後、章はシベリア鉄道経由で無事帰国するのだが、澄子にはそのことを知る由もない。夫の身はどうなったのか、日本に残して来た長男はどうしているか、いつまで戦争が続くのか見当もつかず、澄子にとっては最も辛い時期であった。

そうこうするうちに、旧オーストリア領米・ソ両軍から攻められるという状況になってきた。1944年1月、ソ連軍はレニングラードからドイツ軍を撃退、6月にはポーランドのヴイスマ川まで進撃、8月から9月にかけてルーマニア、ブルガリアを次々に解放、10月にはハンガリー攻撃と、東部戦線ではソ連軍の大反撃が続いていた。一方、西部戦線でも、44年6月のノルマンディー上陸作戦を機に連合軍が攻勢に転じ、8月末にはパリを解放、ベルギー、ルクセンブルクでも勝利をおさめつつあった。ソ連兵のひどさ、特に、女性と見れば乱暴するという話をさんざん聞かされていたので、どうせ来るなら米軍の方がいいなどと思っていた頃、どうもソ連軍が先にやって来そうだという情報が入って来た。

これは大変なことになった、と澄子は思ったそうである。年頃の娘2人を持つ親としては当然の心配であろう。この時長女17歳、次女15歳、澄子は40歳である。「いよいよとなったら猟銃で娘たちを撃ってから、私も自決するつもりでした」と澄子は言う。ところが、そう決心だけはしたものの、銃はあっても肝心の弾が全然手元にない。そこで一計を案じ、ある日普段から親しくしていた森林警備隊の人たちを夕食に招待した。澄子は料理はお得意である。四方山話のついでに、何気ない風を装ってこうもちかけた。「昔はよく猟をしたものだけれど、この頃は全然できなくてつまらないわ。腕がなまってしまったんじゃないかしら。練習してみたいんだけど、弾

がないのよね」。相手はまさかそれが自殺用の弾丸とは思ってもよらない。お安いご用、弾ならいくらでもと、持って来てくれたのはいいが、「それが何箱分もで、何百発もあるのよね。びっくりしちゃった」そうである。

「自決するつもりでした」と澄子は言った。「今の人はお笑いになるかも知れないけれども、これはやっぱり日本人の血でしょうかね。辱められるというのは耐えられないことなのね、明治の人間には。戦争でけがをするのと同じようなものでしょうけれどね」と。長い間外国で暮らして、非常に合理的な考え方を持つ澄子であるが、女性の純潔、貞操という点に関しては明治のモラルを捨てることはなかった。

弾も手に入り、覚悟も決めて、さあいつソ連軍が攻めて来るかと待ち構えていた時、思いがけずスイス行きのヴィザが出た。ずいぶん前に、何とかしてベルリンまで来いという大使館からの指示があったのだが、到底ベルリンまでは行けそうもないためスイス当局に申請しておいたものであった。

スイスは第一次大戦後国際連盟に加入したが、加盟国と非加盟国の対立が明確になった1938年に、連邦本部はジュネーブに置いたまま脱退し、完全中立の立場を表明していた。ところがナチスドイツがヨーロッパを席卷すると全くの四面楚歌状態となり、中立を守るかどうかについて国内で意見が割れた。結局、アンリ・ギボン將軍の指導によって中立姿勢を崩さず、ヨーロッパ各地から戦火を逃れて来る人が絶えなかった。亡命希望者が多すぎて全員を受け入れることができないために審査は厳重を極め、そのためヴィザが下りるまでには相当の時間がかかった。澄子たちは外交官の家族ということで身許もしっかりしており、経済状態も上々の部類であったことから入国を許可されたわけである。際どいところで澄子と子供たちは命拾いをした。

ザルツブルクの借家には年老いたコックと、ハンブルク時代から16年も勤めてくれていたナースがいた。しかしこの人たちにはヴィザが下りない。スイスへの入国が許されたのは澄子と子供たちだけであり、雇い人までは受け入れてもらえなかったのである。このままザルツブルクに留まっていれば彼女たちの身も危険であることに変わりはない。しかしヴィザがなければ国境を越えることは不可能である。残される者の気持ちはどんなものであったろう。澄子はせめてできることをと考えて、向こう1年間今の借家を続けて借りる契約をし、十分な給金を置いて出発することにした。

別れの時、ザルツブルクの友人たちに「あなた方の国は危いから私たちはスイスへ逃げます、とは言えないのよね。現にドイツはもう負けるとわかっていて、彼らも自分の国は終わりだと思っているのだけれど、それはお互い明らさまに口には出せないことでしょう。それで、ここにいたのでは主人とどうしても連絡がとれない、スイスへ行けば何とか連絡がつくだらうから、とにかく行かなければならない、というのを口実にして、戦争が終わったらまた戻って来ると約束して」出かけたそうである。「口実」ということばに澄子の思いがよく表れていた。それでも、最後まで雇い人たちはよく尽くしてくれ、駅へ行く足がないというと、ザルツブルクの人達はどこからかバスを調達して来てくれ、また、村の人々も可能な限りの協力を惜しまなかったとか。これも澄子の人柄であろうか。

こうして澄子たちがスイスへ入ったのは1945年の1月のことである。この月、ポーランドのワルシャワが陥落、4月にはウイーンが陥落している。3ヶ月違いの危い脱出であった。

スイスでは初めベルンの近く、トゥーンという町のホテルに滞在した。が、ホテル暮らしはいろいろ不自由でもあり、レマン湖畔のブベー、ブラームスが住んでいたという由緒ある町の郊外に家を借り、ナースとコック兼メイドを雇って腰を落ち着けることにした。ザルツブルクからトゥーン、さらにブベーまで、直線距離でも約500キロある。500キロというと鹿児島市から南へ向かえば沖永良部島まで、東北へ向かえば兵庫県の赤穂辺りまでの距離に相当する。冬のさ中、雪深いオーストリアからスイスまでの旅は大変なものだったろうと想像される。4人の子供を連れており、末っ子はまだ3歳である。だが、澄子は「私はもともとのおんきですからねえ」と笑っている。「やらなきゃならないとなると、迷うってことがないのよ。考えて考えて、決断したらあとは実行するのみという性格ですから」と言ってすましている。

スイスでの生活が始まった。

7

中立国のスイス入りを果たして、一応身の危険はなくなったとはいっても、いつ日本へ帰れるのか全く見当もつかない。戦争はまだ続いていた。そこで澄子はブベーであせらず時を待つことにした。子供たちを学校に入れ、腰を据えて普通の生活を始めたのである。17歳の長女はベルン大学へ入るための受験勉強、15歳の次女は高校、10歳の次男はフランス系の小学校へと、それぞれの進路を決めた。日本との連絡もとれるようになり、章と長男の無事が確認されて、澄子はほっとする。生活費は外務省から送ってもらって、「ずいぶん贅沢をさせてもらいました」とすまそうに澄子は言う。この点に関しては本省でかなり議論があったらしい。何しろ章は日本にいるわけで、言ってみれば給与の二重払いのようなものだからだ。外交官本人が本省に戻っているのに、その家族が外地にとり残されたまま、などという事態は、外務省開局以来初めて、前代未聞のでき事だったそうである。それでも「とにかく餓え死にさせるわけには行かないだろうということで」、手当ては充分に送ってもらえたという澄子の説明であった。

45年の2月末、ゲッベルスは「ベルリン防衛総監」に任命された。4月25日、ベルリンはソ連軍に完全に包囲される。ゲッベルスは相変わらず戦闘継続を叫び、最後にはヒトラー・ユーゲントの子供たちまで戦闘に投入された。しかし30日、ヒトラーは前日結婚したばかりのエヴァ・ブラウンと自殺。翌5月1日ゲッベルスも妻と6人の子供ともども自殺。ヒトラーの遺言で大統領兼国防軍最高司令官に任命されていたカール・デーニッツが5月8日に無条件降伏して、ヨーロッパでの戦争は終わった。

だが、太平洋ではまだ死闘が続いていた。1941（昭和16）年の開戦後、半年余りは日本も思いがけない勝利の連続であったが、42（昭和17）年6月にはミッドウェイ海戦で敗北を喫し、以後戦線を広げすぎて物資補給もままならない状況で劣勢に立たされ、43（昭和18）年になると各地で玉砕が相次ぐ。44（昭和19）年サイパン島が陥落してからは本土への空襲が激化し、レイテ戦では神風特別攻撃隊が出撃した。45（昭和20）年になると、首都東京も灰燼に帰し、6月には沖

縄が陥落、本土決戦が叫ばれていたが、8月、2発の原子爆弾とソ連の対日宣戦によって敗北は必至となる。軍の一部にはなお徹底抗戦を主張する者もいて、結局15日の玉音放送で戦争は終わりを告げた。降伏文書の正式調印は9月2日になされ、満州事変以来実に15年にも及んだ戦いがやっと終わったわけである。

ドイツの敗北、日本敗戦のニュースを澄子はスイスで聞いた。しかし、相変わらず帰国のめどは全く立たない。ヨーロッパ全土が戦後の混乱状態にあり、それが多少なりとも落ち着くまでは、日本へ帰るなど無理な相談であった。スイスでの生活はなお半年余り続く。

8

敗戦後、章は外務省を辞めた。「戦時中大・公使であった者は一応辞表を出す、ということだね」と言う澄子の説明の口調には、残る道もないではなかったのだが、といった意味が含まれているようであった。だが、太平洋戦争開戦時の東条英機内閣と敗戦時の鈴木貫太郎内閣で2度外務大臣を勤めた先輩の東郷茂徳が、A級戦犯容疑者として「自宅拘禁」処分を受けているような状況の中では、仮りに求められても外務省に留まる気持ちには、章も、なれなかつただろう。東郷の「拘禁」は、東条内閣では開戦を避けるために孤軍奮闘し、鈴木内閣では戦争終結に最大の努力を傾けたにもかかわらず、開戦時の外相という立場が検察側に重視され、夫人がドイツ人であったことから親独派と見なされた結果であった。49歳になっていた章は、郷里、鹿児島島の始良町へ帰って来た。しかし、章はまだ悠悠自適の生活を送れたわけではなかった。鹿屋の終戦連絡事務所長の仕事が待っていたのである。

鹿屋には、45（昭和20）年2月から第5航空艦隊が置かれ、宇垣纏中将が司令長官として滞在していた。8月3日、司令部は大分基地に後退したが、鹿屋にはなお2万人以上の軍人が配置されたままであった。15日の玉音放送で敗戦が決定的になると、自刃する者、ゲリラ戦の準備をする者などで混乱が生じる。だが、16日、大本営海軍部から正式な停戦命令が出され、20日、宇垣の後任の草鹿龍之介中将が解散を命じ、鹿屋基地も終焉を迎えた。9月3日には米軍の進駐が始まる。やって来たのは約200機の飛行機と、およそ5500人の部隊であった。

9月5日、鹿屋市役所内に終戦連絡事務所が設けられ、草鹿中将が所長となったが、30日には更迭。代わって、章が2代目所長に就任した。外交官としての経歴を買われたものであろう。初めの頃には占領軍による盗難、婦女暴行などの事件が続出し、市民たちも戦戦恐恐といった状態であった。しかし、双方ともに次第に落ち着いて行き、進駐軍司令官は、「鹿屋市は日本一の平和占領の目的を達したから、進駐増強の必要はない」と本国へあてて打電したと言われている。章は進駐軍と市民との間に立って、交渉役の仕事に奔走した。

一方、澄子の方は相変わらず、スイスでの生活が続いていた。しかしようやくヨーロッパ情勢も落ち着きを取り戻し、46（昭和21）年になると残留していた外交官関係者も日本へ帰れることになった。ただし、この帰国の道中は「もうお話にならないくらい大変でしたよ」ということである。ヨーロッパ各地に残っていた外交官とその家族をひとまとめに帰国させるために、スペインで船がチャーターされた。ところがスイスの山の中からスペインまで移動することは不可能な

ので、澄子と子供たちを含めスイス残留者は全員船の寄港地であるイタリアのナポリで捨ててもらったことになった。それでも、ブペーからナポリまでは900キロ以上離れている。どうにかナポリにたどり着き、乗るべき船はと見ると、これが廃艦になる寸前というボロ船で、5000トンくらいしかない。以前澄子たちが日本とヨーロッパとの往き来に利用していた船の3分の1以下という小ささである。おまけに船長は相当な老人で、これまで1度もインド洋は航海したことがないという人物。さすがの澄子もため息が出たようだ。地中海はまだ掃海作業が完全には終わっておらず、あちこちに機雷が残っている時で、快速で澄子たちの乗った船を追い越して行ったフランスの巡洋艦がすぐ目の前で沈没する、という事故もあった。老朽して船足が遅かったことで澄子たちは命拾いしたわけである。沈没した船の残骸が浮かぶ海を進む時は本当に恐ろしかったとか。この船では「毎日毎日、パエリアばかり食べさせられてうんざりした」。パエリアはスペインの名物料理で、たっぷりのオリーブオイルでいためた米に、魚貝類などを入れ、スープで炊き上げたものである。「油の使い方が尋常じゃないのよ。上に1センチくらい浮いているのだから。もう胸が悪くなってしまって、とっっても食べられなかったわ」と澄子は言う。まだ冷凍冷蔵庫の設備などない時代のこと、船上で牛を飼っていて、途中で屠殺して食料にしながらの旅だったそうだが、その肉も「固いのなんのって、かめやしない」代物、散散でした、といまだに恨めしげな口ぶりであった。船上では、女たちは編物、子供たちは勉強、若い人たちはコーラスグループを作るなどして過ごした。一番時間を持て余していたのが男性諸氏で、何をやっても落ち着かず、この時ばかりは「女に生まれてよかった。編物でも何でもすることがあるというのは有難いこと」と思ったと、澄子は笑う。

こうして、普通なら30日程の旅に、50日以上かかって、フィリピンのマニラに到着した。マニラでは、日本から迎えに来た榛名丸という船が待っていた。乗り換えて、例のスペイン船を見た時、「こんなボロ船だったかって啞然としましたよ、よくこんな船で無事に來れたものだってね」。榛名丸でご馳走にあずかった「ぼたもち」のおいしかったことだけは忘れられない、「あんなに嬉しいことはなかった」と言う。やっと故国へ帰れるという思いで「ぼたもち」の味も格別だったことだろう。

1946（昭和21）年の3月末、船は浦賀に着いた。章と長男が出迎えに来てくれていた。ブルガリアで章と別れてから3年近くたっていた。長男の顔を見るのは実に8年ぶりのことであった。

だが、澄子たちを待っていたのは夫と息子だけではなかった。

9

澄子たちが着いたのは以前の日本ではなく、連合軍の占領下にある日本であった。上陸はすぐには許されず、徹底的な調査が行われたのである。

新婚当手を過ごしたアメリカは、澄子にとって懐かしい所であった。最初の女の子は亡くしたものの、長男が生まれた場所でもあるそのアメリカは、1929年の大恐慌を乗り切れなかったハーバート・クラーク・フーバーにかわって、33年、フランクリン・デラノ・ローズヴェルトが大統領に就任。同じ年、首相になったヒトラーが不況の克服にファシズムの道を進んだのとは対照的

に、一連のニューディール政策によって経済の立て直しに成功。史上初めて4選され、第2次世界大戦の期間中、民主主義陣営の指導者として活躍した。45年4月、ローズヴェルトが急死すると、ハリリー・シップ・トルーマンが後を継ぎ、戦後処理に乗り出して日本占領政策を押し進めていたところであった。そのアメリカが、占領軍として外交官とその家族たちの前に立ち塞がったわけである。

女性は全員、結っている髪をとかすよう命じられ、中に何か隠していないか調べられた。外套の襟もカバンの底も全部切り裂かれた。澄子たちが最も腹立たしかったのは、婦人科の医者に検査すると言われたことであった。中国や旧満州からの帰国者の一部には膾炙の中に宝石などを隠して持ち帰った女性がいるという情報が伝わっており、澄子たちも検査を受けよと命じられたのだ。澄子は憤然として抗議をした。辱められることより自決を選ぶ澄子である。「あなた方は恥ずかしくないのか。仮にも外交官の家族であった者たちにこんなことをして。私はいい、仕方がない。でも娘たちには絶対そんなことはさせない」と。アメリカ人の医者は謝罪したそうである。自分も命令でしていることだから許してもらいたい、と。外交官特権もなくなって、ただの海外からの引きあげ者として恥辱的な扱いをされたことが、余程腹にすえかねたらしい。「それまでアメリカに対して悪く思うことはありませんでしたけれどね、この時ばかりは本当に憎しみを感じましたよ。皆さんアメリカといってちやほやするけれど、戦争になったら同じですね。人道的な配慮なんて全くないんですから」常に冷静な澄子が珍しく語気を荒げた一瞬であった。

進駐軍の態度は不愉快極まりないものであったが、故国は故国である。夫とも長男とも無事に再会できた。特に息子は別れた時13歳だったのが21歳の大人になっている。戦時中学徒動員され生存も危ぶまれていただけに、元気な姿を見た時の喜びは何物にもかえがたいものであった。東京の兄の所でしばらく体を休めた後、始良町の章の家へ。澄子は41歳で、初めて鹿児島で暮らすことになった。16歳の時、祖母が亡くなったおりに一度だけ訪れたことのある土地であったが、その時は単なる旅行者にすぎず、生活するのは今度が最初である。

澄子の目には日本の田舎はずいぶんひどいものに見えた。これまでの澄子は、東京・ワシントン・ベルリン・ウィーンと、都会でしか暮らしたことがない。オーストリアやスイスでは田舎暮らしを経験したとは言え、ヨーロッパの田舎と日本の田舎では、その生活ぶりには天と地ほどの開きがある。澄子がまず驚いたのは民度の低さであった。子供たちは靴どころかパンツもはいていない。田植時になると、おにぎりを2つ持たされて放って置かれる。澄子は、ある子が地面に落としたおにぎりを、泥のついたまま口に入れるのを見た時非常なショックを受けたと言う。これは何とかしなくては大変だ、という気持ちを押しさえ難かった。加えて章の、「これからの日本は女がしっかりしなくては駄目だよ」という言葉。ここから澄子の、外交官山路章夫人ではなく、山路澄子としての活動が始まるのである。

おわりに

「事実は小説より奇なり」という使い古された言葉がある。山路氏の語る人生航路を聞いていると、正にその通りという気がした。戦争の時代を生きて来た人には多かれ少なかれさまざまな

ドラマがあるだろうことは想像に難くないが、山路氏の場合、日本国内に留まらずアメリカ、ヨーロッパと激動の時を世界的スケールで生きて来られただけに、お話には実に興味深いものがあつた。筆者の拙い筆では充分にその点が表現できなかつたと反省している。

山路氏の前半生をたどってみて気付くのは、氏が非常に冷静で、合理的な考え方をし、熟考の上ひとたび決心すればためらわず実行し、道理に合わないことは相手が誰であっても指摘する勇気と、博愛精神の持ち主であるということである。当時の一般の人々の生活と比べれば、氏が恵まれた環境に育ち、特権階級に属していた人と言うことはできよう。しかし、戦時中の厳しい生活の中で鍛えられて、自分の身は自分で守らなければならないこと、そのためには戦わねばならぬ時もあることを知り、それが氏の性格ともあいまって戦後の諸活動につながって行ったと考えられる。

自己の権利は自分で守る、というのは一見当然のようで、なかなか簡単にできることではない。自己主張することを歓迎せず、とりわけ女性が表面に出るのを良しとしない鹿児島にあって、女性や子供の権利を守るための活動にはさまざまな苦勞が伴つたことと思われる。この点については<戦後篇>で述べることになるだろう。

主要参考文献

- 「かごしま人紀行 始良町③」 南日本新聞 1991年3月15日
犬塚孝明 『薩摩藩英国留学生』 中公新書 (ちなみに犬塚氏は山路氏の甥にあたる方である。)
松尾尊究 『大正デモクラシーの群像』 岩波同時代ライブラリー
フレデリック・ルイス・アレン『オンリー・イエスタディ』 藤久ミネ訳 筑摩書房
同上 『シンス・イエスタディ』 藤久ミネ訳 筑摩書房
飯野正子 『カリフォルニアの悲劇 日系移民と排日法』 『歴史読本 臨時増刊号 No536』 所収
セバステイアン・ハフナー 『裏切られたドイツ革命 ヒトラー前夜』 山田義顕訳 平凡社
山口定 『ヒトラーの抬頭 ワイマールデモクラシーの悲劇』 朝日文庫
村瀬興雄 『ナチズム ドイツ保守主義の一系譜』 中公新書
ハンス・ユルゲン・デッシャー 『水晶の夜 ナチ第三帝国におけるユダヤ人迫害』 小岸昭訳 人文書院
村瀬興雄 『アドルフ・ヒトラー 独裁者出現の歴史的背景』 中公新書
セバステイアン・ハフナー 『ヒトラーとは何か』 赤羽龍夫訳 草思社
ジョン・トーランド 『アドルフ・ヒトラー』 永井淳訳 集英社文庫
平井正 『ゲッベルス メディア時代の政治宣伝』 中公新書
篠田正浩 『エイゼンシュテイン』 岩波20世紀思想家文庫
岩本憲児編 『エイゼンシュテイン解説 論文と作品の一卷全集』 フィルムアート社
クルト・リース 『ドイツ映画の偉大な時代 ただひとたびの』 平井正・柴田陽広訳 フィルムアート社
グレン・B・インフィールド 『レニー・リーフェンシュタール 芸術と政治のはざまに』 喜多迅鷹・喜多元子訳 リプロポート

斉藤孝 『スペイン戦争 ファシズムと人民戦線』 中公文庫

城山三郎 『落日燃ゆ』 新潮文庫

杉森久英 『近衛文麿』 河出文庫

東郷茂徳 『時代の一面』 原書房

萩原延壽 『東郷茂徳 伝記と解説』 原書房

『鹿屋市史 下』

『昭和の歴史 1～8』 小学館

『証言の昭和史 1～6』 学習研究社

『アメリカの世紀 4～6』 西部タイム社

『20世紀の歴史 1, 9, 13～16』 平凡社

『世界の歴史 116, 119, 121～124』 週刊朝日百科

付 記

山路氏へのインタビューは、保坂恵美子（当時鹿児島女子大学，現在長崎県立大学）・大和田明江（鹿児島女性学研究会会員）・伊佐山潤子の3名で行った。山路氏の略伝として〈戦前・戦中篇〉を伊佐山が、〈戦後篇〉を保坂が、そして、大和田は特に関心のある売春防止法制定当時の本県の女性の動きについて、山路氏の活動を中心に報告するよう、仕事を分担した。保坂・大和田のレポートは次号に発表の予定である。